

2017年7月18日～20日

私立大学情報教育協会 大学職員情報化研究講習会
研修報告

A-1班 マインドセット

I 問題意識

昨今は、価値観が多様化し、ニーズの変化が激しい社会になってきている。それに伴い、大学も初年次教育や産学官連携での研究、地域課題の解決等、大学としての機能が拡大してきている。

大学職員としては、社会のニーズにあわせた迅速な対応が求められるところだが、その対応に追われるように、場当たりの策を講じていくことに問題を感じた。時代の流れをただ追うだけでは、大学本来の役割、在り方を見失うことにもつながりかねないのではないかと考えたからだ。

また、大学で何かを変えようとなると、ほとんどがトップダウンであり、ボトムアップの機会は少ない。上層部だけで考えているだけでは意見の広がりがなく、経験の浅い者は教授陣・上司の指示に従うだけで、指示の背景を考えることをしなくなってしまう。一方で、何かを変えたいと思った若手職員がいたとしても、どうすればよいかわからない、できないというのが現状だ。

そこで、A-1班では大学改革をおこなうためには、根本的に何が必要かを本研修で考えることにした。

II テーマ設定

今回の研修において、初日の情報提供で各大学の取り組みについての話を聞き、班内での意見共有の結果、A-1班では、日本福祉大学のタブレット端末の導入による会議のペーパーレス化に共通して関心が高かった。同大学における会議のペーパーレス化とは、タブレット端末を会議構成員全員に配付することで、従来であれば会議当日に必要な資料の印刷費やその準備のために発生する人件費を削減できるだけでなく、事前の資料送付により、構成員が予め会議内容についての把握することで、会議の開催時間短縮（構成員の拘束時間の削減≒人件費の削減）も実現した事例である。

大学の機能・役割が煩雑化し、職員がどのように大学改革に関与していくべきか問われる中、A-1班は、この改革事例が、職員としての大学改革への関わり方を考えるためのヒントと捉えた。

この事例において、単にタブレット端末を導入しただけでは、これほどの効果は得られなかっただろう。あらかじめ会議構成員全員に、タブレット端末導入後の効果（構成員の拘束時間の削減≒人件費の削減）を具体的な数値で示し、各々が納得したうえでのペーパーレス化だったからこそ、実際の成果が得られたのだろうという結論にA-1班では至った。

つまり、職員は得られる情報をもとに具体的な根拠を提示することで他者からの合意形成を得る姿勢、構成員（教員）に改革（≒タブレット端末導入）の意図を認識させ、継続的に効果的な運用を図ることが大学改革には求められるということになるだろう。A-1班では、以上のことを一言で「マインドセット」（意識改革の英訳である）という言葉で表すことにした。

あえて「意識改革」ではなく、「マインドセット」という言葉を使用した理由としては、昨今「意識改革」という文言が使われるとき、それは“一時的（表面的）な対処（考え方）”になりがち

である。今回、私たちは“根本的・継続的な対処（考え方）”を表現したいことから、英訳である「マインドセット」という言葉を使用した。

Ⅲ課題

上記で述べたマインドセットによる大学改革を実現するためには、提案の根拠を示し、提案の意図を伝えることが求められる。そのためには、客観的な数値データが必要である。

そこに関して、職員はデータを収集し把握できる立場にあるが、班内での課題共有で有効に使えていない現状があった。その要因として、多くの職員（大学）が、日々の業務に追われ必要なデータを作成する時間がない、他部課がどのような情報を持っていて提供してもらえが不明である等、データ（情報）を把握できる立場ではあるが、活用する時間や環境がないといった課題があった。

Ⅳ課題解決のために

A-1 班は部課単位・個人単位での心がけにより、データ（情報）を活用するための土台を作ることが、後々、教職員のマインドセットにより職員主導で改革を実現する環境を形成すると考え、課題解決のために以下の3点を掲げた。

- ・ 部署内の情報ルールづくり
- ・ 他部署との情報共有
- ・ 他大学の情報集

これは、データ（情報）を把握できる立場ではあるが、活用する時間や環境がないといった課題が、情報整理の機会とルールを設けるという基礎的なことから徐々に改善され、多くのデータ（情報）に触れる機会が増え、改革の為の根拠となる具体的な数値を提供しやすくなると考えたからである。

Ⅴまとめ

今回は、大学改革のための提起をしたい職員がいることが前提になってしまったため、時代に適応した大学像を提起できる人材をどう育成するべきかは今後の課題になった。

今回の研修は、ICTに関するものであったため、当初はICTに着目しがちであったが、他大学の事例を学び、グループで討論することで、別の視点から大学の現状と、あるべき姿について考えることができた。こういった型にとらわれず、本質を探る視点を大事にしていきたいと思う。